

# 精神の発達

(2)

## 動物の幼児の行動の発達

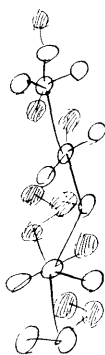
浅見千鶴子

### 動物の幼児の行動の発達

前号で述べたことを念頭におき、いくつかの動物幼児の行動の発達のすがたを見よう。ニホンザルは霊長目の一種として離巢性をかなりの程度示す種類である。出生直後から開いた目と発達した感覚器官と運動器官とをもって生まれる。ウマやウシは誕生して一時間もすると自分で立ち上って親の後を追って走り出せるほどであるがサル類になるとその点やや頼りなさが多く、最初はつかむ働きはよ

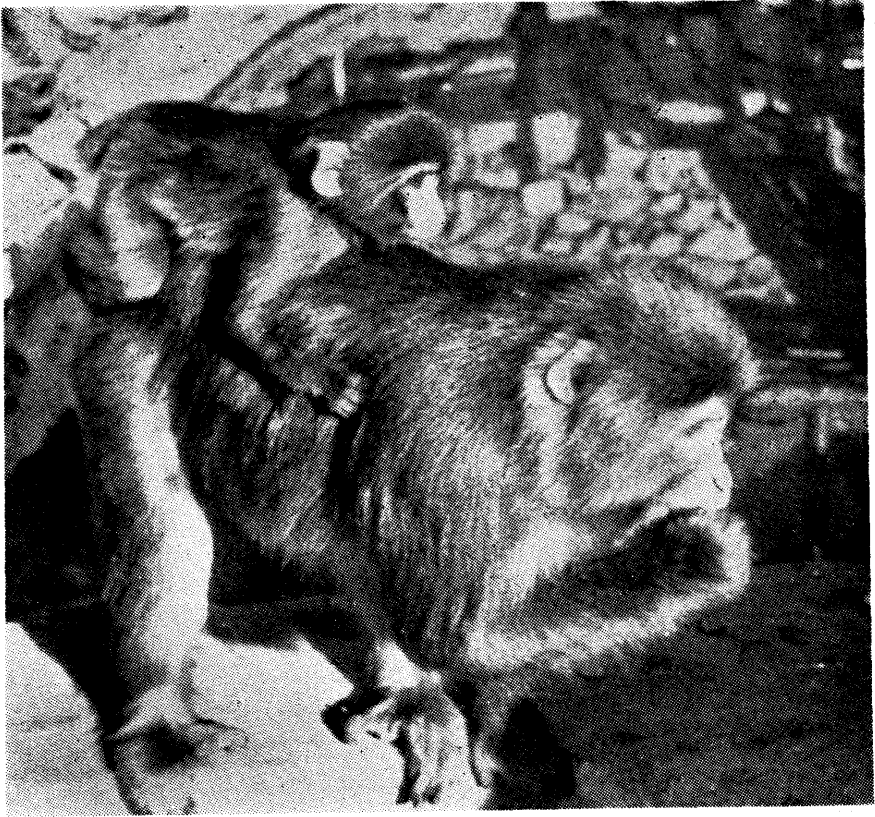
### 児童発達講座

③



く発達しているが歩けない。しかし自分の力ではい上って母親の毛にすがりつくことができる。一週間ぐらいすると頼りない足どりはあるが歩けるようになる。そして最初の一月の間にあらゆる運動能力が表現され、発達してゆく。

ある出生後直ぐからの飼育記録によると、最初の頃は仰向け、あるいは俯伏せにねころんで、手足を動かしていただけだったが、次にすわることができ、それとともに歩行、走ること、つかまることが、立ち上ること、よじのぼること、指の操作などできるようになり、一カ月の間にほぼ完全になった。これらはいわゆる基本的行動であり、二カ月に入ってからにはこれらの基本的行動が更に複雑化してゆく。肢のバネを利かしたジャンプ、蛙とび、空中を一米くらい離れたところから跳ぶ。小さなものに興味をもち、巧みにつまみ上げ、



口にもってゆく。好奇心が強く探究行動をしきりにする。

情動的には十七日頃に「すね行動」が現れた。これは愛撫が求められなかったり、気に入らないことがあったりして欲求不満をおこしたときに、独特な身振りや表情で大声をあげて啼き叫ぶ行動である。うずくまって、後向きに顔をむけてしゃくり上げるようにギャーギャー鼻声をあげて啼く。六カ月くらいまで何か不満があるとすぐこの「すね行動」を示したが、次第に少なくなっていく。人工哺育なので吸乳運動が短い為か指しゃぶり行動が現れた。これも六カ月前後で何でも固い食物も十分咀嚼できるようになると消失した。愛情の表現であるといわれる R. L. M. (Riley - thmic lip movement) も十カ月以内に示されるようになった。二カ月頃から「人みしり」が現われ、馴れない人の出現をひどく恐れた。音声の発達をみると初期の頃は「おそれ」の表出が多く、「怒り」「呼びかけ」もかなりある。しかし、進むにしたがって「おそれ」の

お母さんが来てくれるまでだんじて動く  
ものか (229日)

すねっこ



モンキー 1962. no. 51. 52. p 11

表出は減少してゆき、個体の自然的表出から、社会的表現としての音声の移行が見られる。

野生の自然群の中でのニホンザルの子どもは体の自由がきくようになると赤ん坊ザルのグループをつくり、その中でお互いに追いか

け合ったりとつ組み合いをしたりして遊びまわる。母親の近くにいつもいてあまり遠くへは離れようとしなない。何か事があると直ぐに母親の許にかけつける。ときには母親の方が子ザルの足をつかまえて遠くへ行かないように警戒することもある。子ザルグループは群の中心にいるが成長すると中心を離れワカモノグループを作る。メスザルの若者はムスメグループをつくるようになる。そしてムスメザルが赤ん坊ザルの守りをすることもあるという。そして子ども間に次第に群の掟やしきたりを覚えてゆき、群の統制に服し、順位をもって、群生活を維持してゆくように成長するのである。

ネズミ(嚙齧類)は就巢性の代表的なものである。子どもは一腹に五〜一〇匹内外一度に生まれる。生まれた直後は体毛は生えていなくて赤裸であり、眼や耳は閉じている。これは早すぎる出産に対する保護のためだといわれている。赤子はわずかに四肢を動かして、這うことはできるがほとんど自分では動けない。母親の乳房に吸いつくことはできる。出生時の体重は十グラムくらいで小指の先ほどの大きさであるが、七〇日くらいで成熟する。このときの体重は二〇〇グラム近くなる。さらに成長をつづけ、一年近くになると三〇〇グラム以上にもなる。

体毛が生え揃うのは大体一週間前後で、眼が開くのは十六日〜十八日くらいである。この頃はまだ頭の大きさは大分大きい。一週間

ぐらいで大分歩けるようになるが、まだ這い加減である。眼が開く頃はかなり速く歩くし、走ることもできる。離乳は三週間頃からといわれている。体重は四〇〜五〇グラムに達する。その近くから固型のかじり出すが、離乳期頃は親と同じものを食べることが出来る。しかし、三週間しても母親といっしょにしているとまだ乳ものむ様子であるが、ネズミの乳児期は大体これで終り、以後は活動性が著しく増してくる。仲間同志で組み合ったり追いかけ合ったり、親にもチョッカイのように足をかけたり、舐め合ったり、非常に遊びの行動を示す。また、自分の毛づくろい、顔洗いの行動など、眼の開く頃からしきりに見られるようになる。群衆性が強く、数匹いっしょにいと互いに重なり合って一塊りのようになっていていることがある。おそれ、怒り、攻撃的な行動も眼の開く前後から見られる。このような活動性は成長するにしたがって減少してゆく。

R. M. Cruikshank<sup>(4)</sup> は種々の動物の幼児の行動の発達の観察をまとめて表に示した。次頁にこれをあげておく。これによると感覚的な行動は霊長類に早く現れ、嚙歯類では多くの日数がかかっている。しかし、運動性の行動は嚙歯類に早く現れるが、これはその成長速度が速いためと見られる。小型の動物ほど運動行動は早く完成して現れ、大型のものほどゆっくり発達するように思われる。しかしこれは相対的のものであって、全寿命に対する割合としては就巢性の

#### ねずみ かたい餌を食べようとする (20日目)



第5表

	ネズミ	モルモット	ウサギ	ネコ	イヌ	サル	チンパンジー
瞳孔反応			12~14日	7~12日		2, 3日	1週目
目ばたき(非視的)		1日	2~14日	9日	13日	1, 3日	1日
目ばたき(視的)	17日	2日		11日	3週目	8~10日	10週目
追視		2日	22日	14~15日	18日	3~11日	1~2週
到達(視的方 向づけ)						5~6日	8週目
音への反応	17日	1日	10~11日	8日	17日	2~4日	1日~7日
聴的定位置		1日		9~26日	3~4週	12日	
嗅覚反応	1日	1日	4~7日	? 1日	1~2週	2, 3日	
味覚反応	1日	1日	2週目	? 9日	1週		2日
触反応	? 1日		1日	1日	? 1日	1~3日	1日~7日
痛反応	1日		1日	? 1日	1週目	1週目	1日
温度	1日		1日	1日	1週目	1週目	1日
面定位置	1~4日		1日	1日			
空中定位置				28~30日			
掻き行動	14日		1~2日	1日, 16~23日	17日	17日	3, 5カ月
這う行動	4日	1日	1日	1日	1日	1日	7~11週目
泳ぎ				1日			
坐り			15~17日	20~21日			12週目
立ち上り	12~14日	1日		14~15日	? 2週	? 2週	12週目(四肢) 27週目(直立)
歩行	12日	1日	6~12日	20~22日	2週	2週	13週目(四肢) 29週目(直立)
走行	14日	1日		26~28日	5週目	5週目	23週目
登り	12~14日			18~31日			25週目

(R. M. Cruikshank : Animal Infancy, (Manual of Child Psychology 1947))

ものより、離巢性のもの方が運動器官などの発達も進んでいるわけである。

(注)

1 ADOLF PORTMANN, Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen 1951 (邦訳、高木正孝訳、人間はなにごまで動物か、岩波新書)

2 川辺寿美子、川村俊蔵。隔離飼育されたニホンサルのアカンボ期における発達(一) 生理生態 第9巻 第2号、一九六〇、96~104

3 竹田瑠美子。ウツと共に モンキー No. 51~52 一九六二、6~11

4 R. M. CRUIKSHANK, Animal Infancy (Manual of Child Psychology 1947 42)

\* \* \*